

講義録

「終活」ブームの背景と課題
— とくに葬儀や墓に関する問題をめぐって —

中野敬一

What is behind the Increased Debates on *Shukatsu* (Making Preparation for One's Death)? Exploring the Issues Regarding Funerals and Tombs

NAKANO Keiichi

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 教授

連絡先：中野敬一 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科
k-nakano@mail.kobe-c.ac.jp

(1)	<p>当日配布レジュメ</p> <p>1) 「終活」という用語 2009年週刊誌による報道、2012年の新書・流行語大賞トップランナー。 「終活」講座(セミナー)、「終活」カウンセラー・プラクティナーなどが登場。 保険、相続、葬などの相談業務。 「終活」「若い文庫」といった用語も散見。</p> <p>2) 終活ブームの背景 ①単独世帯の増加(未婚、死別、離婚) 十子どもがいない。 →「死後、異りの人に迷惑や負担、面倒をかかれない」という思い →具体的に行こうと、考えておくべきこと 財産相続、遺物整理(処分) 延命措置、葬式や仏に対する希望 「エンディングノート」の作成</p> <p>②超高齢社会 65歳以上の高齢者 3,384万人(総人口の26.7%)。80歳以上は1,002万人(総人口の8.1%) →経済的不安、高齢者の貧困問題 →健康上の問題(病気、介護、看护、葬儀死など)</p> <p>③意思表示の必要 医療技術の進歩による様々な選択権。 延命治療、QOL、安楽死・尊厳死、臓器提供、終末医療等について、本人の意思を明示しておくことが重要となる。</p> <p>④生の充実 タブーであった「死」と正面から向きあうことにより、人生の「終わり」を意識し、残された生が豊かにもとなる。後悔しない人生を送ることができるという考え方が共感を得ている。 *1980年代に「死への密着教育」として提起されたものが「終活」に繋がっている？</p>
-----	--

(2)	<p>⑤死生観の変化 共通の死生観が多様化し、死後についての考え方も個人によって異なっている。 自分の考えを、それに合う葬送儀礼や墓などを進め、</p> <p>3) 終活の評価 ・「建造」や「義務」「面倒」をかけたという点がキーワード。 周りの人への気配りは大切なことであり、さまざまなことに関して意思表示をしておくことで周囲の人間も安心。 ・終活をすることで、本人が生を充実させて後悔の無い人生を送ることができるのは、良いこと。 しかし、課題も少なくない。</p> <p>4) 葬儀、墓の問題から考えてみる ①葬送儀礼の現状 ・簡略化、簡素化の傾向 「一般葬」から「家族葬」さらに「直葬」の増加、通夜無しの「一日葬」も。 葬式無用論(不要論) 背景は、超高齢化、経済的理由、死生観の変化、葬儀や葬儀への批判、宗教への不信などがあげられている。</p> <p>②墓に関する現状 ・先祖代々(家墓)から、永代所費墓、共同墓、個人墓の希望者が増加。 1990年代から急速に変化。少子化の影響によると考えられている。 *1980年代は新しい墓送の展開(斎 謙二) 1974年(昭和49)合計特殊出生率半端を切る。 1989年(平成元)「1.57ショック」 葬儀の確保が困難→家墓を承継することができず無縁墓になる可能性が高い。 高額の墓を購入しても無縁墓になってしまう。 ・承継者がおらず無縁墓が増加(特に地方都市)。</p> <p>・新たな埋葬方法 「散骨」や「樹木葬」などが普及、承継者がいないので墓を購入しないというケー</p>
-----	--

(3)	<p>スや遺骨そのものに関心が無いという人、高額の葬儀は不要という人がいるなど、理由は様々である。 ただし、墓前には問題点も指摘されている。 (地的整備、環境問題、地域住民からの不満、業者の問題など)</p> <p>③墓に対するイメージの変化 ・「象徴性、永続性、固定性」から「親人性、無縁化、流動化」に変化(櫻井) 先祖崇拝より自分の死後設計、遺骨から来葉へと意識が変化、未来志向と個人化 ・自分で選ぶ「死後の住居」(熊手) 見たことのない先祖という「過去の家族」よりも現在と未来の家族に増して意識が向いている。お墓は「私たちの家族」が意識され、現在の家族の延長として「死後の私たちの住居」と捉えられている。ペットと一種同居することを希望する人も。 ・生前に自己の墓を購入。死者のためではなく、自分が「死後の住居」を確保する。 希望する墓地空間は、明るい公園のような場所、静かな場所、社会から隔離されていない。 ・葬儀の自己決定、死者葬儀の担い手が本人自身。 「これまで日本の葬送秩序を支えてきたのは祖先祭祀であり、この思想は自己の死後を子孫に委ねるという思想」(斎)であった。</p> <p>④疑問と課題 終活の一環として、遺されたものに迷惑や負担をかけないように、葬儀や墓を自分で決めておきたいという気持ちは理解できる。しかし、 葬儀や墓の簡素化、簡略化、葬式無用論は良い傾向といえるのか。</p> <p>葬儀や墓には様々な意義がある。 a. 葬儀は故人の意思を尊重すべきものであるが、同時に遺された者が死者を送り、死を受容するための必要なものである。 b. 墓は遺体(遺骨)を埋葬する場所であると同時に、「生者と死者の交流の場」、人の「絆」を確認する場でもある。そのような意義はあるのだろうか。 c. 葬儀や墓は遺族や参列者が「死」について深く考える貴重な機会である。 d. 元来、葬儀や墓の手配は逝く者ではなく、送る者による行為ではないのか(「死者葬儀の担い手は死者ではなく、生者である。') 遺された者の意思も尊重されるべき。葬儀後に後悔することもある。</p>
-----	---

(4)	<p>e. 簡素化や簡略化によって失うものがある。 終活において葬式や墓について考えることにつながるが、熟考が必要である。 既存のやり方を単純に批判するのはよく、多面的に評価することで重要な側面を再確認できるのではない。</p> <p>5) まとめとして ・備えておくことは何事に対しても大事なことである。人は未来を予測できない。一たし、その意において、終活は本人だけのものではない。 ・「なめらうこと」の大切さ。 目・葬送儀礼は選択、想定外のスピード、対応に遅れがあるも現実。 重要なのは、「ためらうこと」そして、それを語り合うこと。 「何がえのないもの」とは「はっきりと別れること」のできないもの」 (児玉真実『死の自己決定権のゆくえ』より)</p> <p>・「終活」に臨んだり、強迫されたりすることがないようにするべき。 個人の作業になりがちだが、他者と相談することも重要。 さまざまな考え方を尊重し、尊重されなければならない。 ・送迎や面倒をかけたことはいいことであるが、それが強制される人間関係や今日の社会のあり方も問題がある。 ・自己決定して、時や環境に応じて、考え方も変わる可能性は多いにある。 謙遜を忘れぬことが大事。決定しても実行できるのは自分であるとは限らない。</p> <p>主な参考文献 児玉真実『死の自己決定権のゆくえ-葬儀と「無益な治罪」論-』編者 斎 謙二 大月書房、2013 島田容己『葬式は、要らない』幻冬舎、2010、『お葬-あつさり死め』集英社 2014 櫻井久子『お葬の社会学-社会が変わるとお葬も変わる-』晃洋書房、2013 斎 謙二『葬送と社会集団 葬法の社会的考察』新行同社『講座 葬法 葬儀 葬送 葬儀の歴史-葬儀への準備と墓』昭文堂、1999 ——『墓と葬送の現状 祖先祭祀から葬送の自由へ』東京堂出版、2000 ——『墓と葬送のゆくえ』吉川弘文館、2014</p>
-----	--

○中野 皆さん、こんにちは。きょうは「終活」ブームの背景と課題—特に葬儀や墓に関する問題をめぐって—というタイトルでお話をさせていただきます。私は以前キリスト教の教会で14年間、牧師をしておりました。教会はキリスト教の礼拝が中心ですが、時には葬式や結婚式も行います。葬儀のときには必然的に「死」と向き合います。私はその都度、人が老いることや、あるいはどのようにして人は亡くなっていくのかについて深く関心を持つようになりました。やがて、それらを自分の研究テーマにしたいと思い、具体的には葬儀や墓に関することを考えてきました。

今回は「終活」という言葉を用いています。終活の専門家ではありませんが、この言葉を最近よく耳にしていらっしゃると思いますので、それをテーマにして話をさせていただきます。

まず、「終活」という用語です。以前は「しゅうかつ」というと「就職活動」を指していましたが、今では「終活」を指す場合も増えてきました。終活は造語です。2009年に『週刊朝日』がこの言葉を初めて使ったと言われています。2010年には流行語になり、2012年には新語・流行語大賞のトップテンに入ったことで、さらに知られていきました。あわせて終活セミナーや、終活カウンセラー、終活プランナーといった職業も続々と登場し、ブームを後押ししています。業界では、保険や相続のこと、墓のこと、あるいは葬式のことなどを含め、さまざまな相談に乗ることを主な業務としています。

終活ブームの背景は一体何であったのでしょうか。いくつかの原因があるわけですが、レジュメにそって説明します。まず、①単独世帯（一人暮らし世帯）の増加があげられます。未婚率は年々上がっています。2010年のデータでは15%となっていますが、実は1950年には1.4%でした。60年前と比較すると約10倍ですから、かなりの割合で結婚しない人が増えたこととなります。また、高齢化に伴って、配偶者が亡くなった後に長期間一人だけになっている方が多くおられます。世代を問わず離婚率が上がっているのも単身世帯が増えている原因です。

少子化も単独世帯の増加に関係しています。結婚しても子どもがいなけれ

ば将来は単独世帯になる可能性があります。子どもがいたとしても遠く離れて暮らしている場合もあります。事情はさまざまですが、一人であるがゆえに、もしくは将来一人になる可能性が高いゆえに、あるいは配偶者に頼ることが難しいゆえに、多くの人々が自分自身で終わりの準備をしておくことが大切だと考え始めたわけです。

そこには、死後、周りの人に迷惑や負担、面倒をかけたくないという心情が見られます。後で触れますが、終活のキーワードは、「迷惑」、「負担」、「面倒」であると理解しています。終活への言及には、この3つの言葉が頻繁に登場します。子どもたちや周りの人たちに迷惑や負担をかけたくないということです。

そのためには、具体的に何を行うのか。財産相続、荷物整理や処分、病気になった場合の延命措置についての希望、あるいは葬式や墓に対する要望を事前に決めておくのです。それを記録する「エンディングノート」の作成も必要となります。エンディングノートは遺言書とは異なり、法的効力はありません。けれども、これがあることにより遺された人は助かります。いろいろな種類のものが書店に並んでおります。よく売れており、人々の関心の高さが伺えます。

つぎに、②超高齢社会があげられます。日本は、超高齢化ではなくて既に超高齢社会に入っています。現在65歳以上の高齢者が3,384万人で、総人口の26.7%。80歳以上は1,002万人です。昨年、1,000万人を超えたということを経験済みです。これに伴い、かつてはなかった悩みや不安が非常に増加してきました。退職後の人生はかなり長くなりますから、生活を支えるお金について考える必要が生じます。高齢になれば、今は元気であったとしても、病気や介護に備えるお金についての不安が増していきます。配偶者のいずれかが先立つと、孤独死という不安も大きくなってきます。

③にいいますが、意思表示が必要とされる時代になりました。医療技術の進歩によりさまざまな選択肢が増えたからです。たとえば、延命治療や

QOLに関することです。QOL (Quality of life) とは、人生の質、生活の質といったものですが、このような状態で、なお生きることに意味があるのかという問いがなされています。

安楽死や尊厳死の問題もあります。安楽死は日本では認められてはいませんが、消極的安楽死と積極的安楽死という2つがあります。積極的安楽死は、薬物などを投与してそのまま死に至らせる。これは殺人になります。消極的安楽死とは、いわゆる延命治療はしないことであり、必要な栄養や薬を投与しないので死期が近づいてしまうということです。この消極的安楽死が、「尊厳死」と呼ばれています。こちらは暗黙の了解で認められています。

臓器移植をするかどうか、についての意思も問われます。「脳死」という新たな死の概念も登場しました。かつては、そういうことを考えなくても良かった。しかし、これも考えておかなければなりません。

終末医療ですが、病院で終わりを迎えるときにどのような迎え方をしたいのか、延命治療とも関係していますが、本人の意思を明示しておくことが重要です。家族や周囲の人たちが大変悩むことが多々あるということを皆さん御承知かと思います。私の知人でも、何年も意識が戻らない方が家族におられ、このままで良いのだろうかと苦悩している人がいます。でも、延命措置を止めることにより死期を早めてしまうことになるので、その決断をして良いのだろうかとも躊躇しておられるのです。

もしこうなった場合にはこうしてほしい、という本人の意思が事前に示されていたら家族も判断しやすいのですが、ない場合には、もしかして本人は少しでも長く生きたいと思っているのではないかと、私たちが決めてしまっただけよいかということに悩むことになります。

暗い話ばかりになりました。少し気分を変えましょう。終活ブームの背景はいろいろです。④は少し感じが違います。生の充実です。タブーとされてきた「死」と正面から向き合うことにより、人生の終わりを意識し、残された生が豊かなものとなる。そのほうが後悔しない人生を送ることができるという考え方に共感する人が増えてきています。

タブー、つまり「死」が公の場で、しかも積極的に語られることはありませんでした。人が集まって、「きょうは死の話でもしようか」というと、「やめておこう」となりますよね。けれども、死について正面から向き合うことは大事なことでないかと思います。なぜなら必ず人は死に遭遇しなければならないからです。人が生きるということは、必ず死を迎えるということです。言葉をかえますと、人は生まれた瞬間から死に向かって歩んでいるのです。複雑な心境になってきますけれども、事実としてそうですね。ですから、どこかで考えておくということは有意義なことであると思います。

今日では少しずつタブー視されることが減り、このような話が公でされるようになりました。そのきっかけは、日本では約30年以上前から始まりました。1980年代に「死への準備教育」として提起されたものが、今日の終活につながっていると私は思っています。この教育を始めたのはアルフォンス・デーケン氏です。上智大学で長く教鞭をとられた哲学者で、今は名誉教授となっております。

その少し前、1960年代に、アメリカでも死についての教育がはやり出していました。その背景には、死がだんだん日常から遠くなってしまったということがあげられています。死を見る機会が減ってしまったということですね。

日本でも同様です。日常から死が遠のいています。私たちは死を見る機会がありません。いまやほとんどの人が病院で死を迎えます。身内の死以外の、他人の死を見る機会はないでしょう。身内の死であっても、死ぬ過程は見えないのです。自宅で身内が亡くなっていく場合は、毎日の変化がよくわかり、このようにして人は亡くなっていくのだということを知ることができました。しかし、核家族であれば死に接する機会ほとんどありません。

戦争や紛争もなく、環境衛生面も改善されて伝染病による死者数が減り、ますます日常から死は遠ざかっています。死を見る機会がなくなった。デーケン氏は、このような時代であるからこそ積極的に死について考えておくことは大事だと提言されたのです。その講義には学生をはじめ、多くの人が集

まりました。

けれども、今の終活ブームほど一般的に盛り上がることはなかったようです。依然として人々にタブー意識があったのと、早急に考える必要性はないと判断したのでしょう。ところが、今や大きく状況が変わって、これまで以上に死について考えざるを得ないという時代に来ています。

つぎに、⑤の死生観の変化です。共通の死生観が多様化し、死後についての考え方も個人によって異なってきました。それに関連して葬送儀礼や墓に対する見方も変わってきたのです。例えば死後の世界について述べるときに、日本人にはほぼ共通の認識がありました。日本は仏教の影響が強いため、ほとんどの葬式は仏教式です。葬式後には長年続く法事があります。この段階を経て、最終的には先祖の仲間入りをするのが基本パターンです。人が亡くなると、遺された者が葬り、長い年月をかけて死者を記念するというパターンがあったわけです。だから、余計なことを考える必要がない。これまでの伝統や慣習等を踏襲していけばよかったです。ところが、今日では状況が変わってきました。

たとえば、学生からのアンケートにおいてもそれが顕著です。死後の世界はあるという人もいます。しかし、死んだらすべてが終わりという人もいます。死後の世界などは人間が勝手に考えたもの、という意見もあります。興味深いのが、生まれ変わりを信じる割合が多いということです。

いずれにしろ、多様な意見に分かれていて、それによって葬送儀礼や墓に対する考えも変わってきます。死ねばすべてが終わりだという人には墓なんかどうでもよくなります。葬式も適当でよい。やりたければご自由にどうぞ、ということになります。今がそうであれば、これから先の時代は、さらに考え方が多様になってくる可能性があります。それぞれが独自の考えにより、独自の選択をするということが増えてくるのではないかと思うわけです。

さて、以上が終活ブームの主な背景であると考えています。つぎに終活という行為についての評価を行いたいと思います。結論から述べますと、私は

終活が決して悪いことではないと思っています。死とまともに向き合うことは大事です。死から目をそらさずに、しっかり見つめることで、今の生が充実してくるという考え方にも賛成します。終わりを意識し、その時までには自分は何ができるのかということを考えて、自分の人生を日々大切にしていけるのは非常に意味があると思います。

さらに、周りの人々への気配りは大切なことだと思っています。さまざまなことへの意思表示も周囲の人間に安心感を与えます。迷惑や負担、面倒をかけないということが終活のキーワードと言いましたが、その姿勢にも好ましいものがあります。

けれども、一方では終活がもてはやされていることを少し怖いとも感じており、本当にそれで良いのかと思ってしまいます。いろいろな面から指摘したいのですが、それでは雑駁な話になってしまいますので、葬儀とお墓の問題に焦点を当てて説明していきます。

まず、葬送儀礼の現状です。以前に比べて簡略化、簡素化されています。具体的には一般葬から家族葬、直葬への増加傾向がみられます。一般葬とは、私たちがよく知っているスタイルの葬式です。親族だけでなく一般の方々にも参列して頂く平均100名ぐらいの葬式を指します。現在、全国平均で180万円ぐらいの費用がかかっています。数年前までは約200万円でしたが少し下がりました。それでも180万円ですから大金です。そして年々、この一般葬を行う人が減ってきているのです。

理由は大きく分けて2つあります。1つは経済的な問題です。費用が高くて払えない。特に高齢化に伴い定年退職後の人生が長くなり、蓄えが尽きて葬式代が出せない人がいます。これは切実な問題です。もう1つは、葬式参列者の不在という現実です。高齢者の知人、友人らも高齢であるがゆえに、体調不良などで葬儀に参列できないのです。故人が退職して間がなければつき合いもあり、仕事上の関係者が葬儀に列席しますが、長い年月が経つと、つき合いも減り、遠のいてしまいます。

故人ばかりか、その子どもたちが高齢になっていることも少なくありませ

ん。そうなる子どもとの関係者さえ体調上の理由などで参列しなくなります。結局、人が集まらないのに高額で大きな葬儀をしても意味がないということになり、規模の小さな「家族葬」を選ぶのです。これは親族と近親者だけで行う葬儀で、費用も一般葬の半額程度でかなり安くなります。

それでは、家族葬が主流になるのかと思いきや、そもそも葬式そのものが必要なのかという考え方が出てきました。「葬式無用論（不要論）」といます。超高齢化、経済的な理由、死生観の変化、形骸化やぜいたくへの批判、宗教への不信などから論じられています。なかでも、宗教への不信は大きな問題となっています。特に仏教に向けての批判があるのです。

日常から親交があるならば、葬式のときにはあのお坊さんに来てもらおうとなりますが、そういう関係性が薄れている。葬式のときだけお坊さんがあらわれて、高いお金を払うということに疑問を持っている人が増えたと聞きます。しかも、戒名という大きな問題があります。これが非常に高額である。そもそも、どのようにして値段が定まっているのか不明だと指摘されています。戒名によって50万円とか、それ以上と言われても、なぜそんなに高いかわからないし、本当にこれは要るものなのだろうかという話になってくるのです。もちろん宗教への不信は、個人の信心の問題とも無関係ではありません。

このように参列者もいない、お金もない、仏教や宗教にも不信がある、となると葬式が要らないのでは、という話になります。でも、遺体は何とかなければなりません。それを解決するのが直葬です。直葬（ちよくそう）とは、病院で亡くなったなら病院から火葬場へ直送する。葬式を行わないのです。遺体の搬送代と火葬代などのみですから、費用は低料金となります。昨今、直葬の需要が急激に増えています。首都圏では3割といます。ある葬儀業者によりますと5割になるのは近いそうです。周りで直葬をする人が増えてくると、日本人は流されやすいですから、この勢いはさらに増していくのではないかと予想されます。

さらに、通夜なしの「一日葬」も登場しました。お通夜を省略するのです。

2日間では費用もかかるし、体力的な負担も大きいので、1日でまとめてしまおうという合理的な考え方です。ちなみに、初七日を葬儀後に行うというのも合理的な発想ですが、今では初四十九日まで行われるようになりました。再び人が集まるのは大変だし、節約になるからです。こういった現象が葬送儀礼において起こっています。

つぎはお墓の話です。墓事情も変化しています。「先祖代々墓」、いわゆる家墓といわれるものですが、死後ここに入ることを希望する人が減り、永代供養墓、共同墓、個人墓の希望者が増加してきています。1990年代から急速に変化したと言われ、これも少子化の影響によると考えられています。森謙二氏という葬送や墓についての研究者が、1990年代は新しい葬送の展開だと指摘しています。1974年（昭和49年）に、合計特殊出生率2.0を切るという大きなことがありました。1989年（平成元年）には1.57ショックがあり、さらに出生率が下がった。こうなると、後継ぎの確保が非常に困難になってきます。家墓を承継することができず無縁墓になる可能性が高い。結局、先祖代々墓といっても、それを受け継いでくれる人がいなくなったのです。

ちなみに、「承継」と言っていますが、墓には承継という言葉が正式です。継承ではありません。法的に権利や義務を受け継いでいくことを承継といいます。後継ぎがいなければ、墓を承継することができずに無縁墓になる可能性が非常に高くなる。高いお金を出して墓を購入しても無駄になります。実際、承継者がいなくて無縁墓地がどんどん増えています。熊本県に人吉市というところがありますが、5割近くが無縁墓になったというニュースを聞いて驚きました。若者が地元を離れ、墓を誰も面倒を見ないので無縁墓になっているのです。でも、都会では逆に墓が足りません。新しく墓を増設する土地が少ないからです。ゆえに墓の価格が上がり、新たな埋葬方法が必要となるわけです。

たとえば、散骨とか樹木葬という言葉を最近よく聞くようになりました。承継者がいないので墓地を購入しない人や遺骨に関心が低い人、高値の墓は不要という人など、理由はさまざまです。当然、一般的な墓を購入するより

安く済みます。承継者の問題、経済的理由、宗教離れなど、葬送儀礼と同様の理由が、このような状況を生み出したのです。

ただし、散骨にはかなり多くの問題点が指摘されています。骨を砕いて海にまくと言っても、漁業関係者にとっては迷惑な話です。海の近くに住んでいる人からすれば居住地近くにまかれるのは余り気持ちの良いものではありません。かなり遠洋に行く必要があります。あるいは環境問題も指摘されています。海ではなく、山林に散骨した結果、パウダー状になった骨が雨で固まって土に帰らないという状況も報告されています。これは自然に悪影響を与えるでしょう。しかも、それが人の目に入るのも気持ちがよいものではありません。海と同様に、山奥の人里離れたところで行うべきでしょう。

ちなみに、散骨は法的に認められているわけではありません。ただ、禁止はされていないため、大きな問題がなければ良いのでは、という段階です。今後どうなるのかは不明です。また、業者についても問題がないわけではありません。業者任せにする場合、どの程度丁寧な作業をしているのかを確認する必要があります。

さて、このように新しい墓が登場しているだけでなく、墓に対するイメージの変化も起こっています。榎村久子氏という墓に関する研究者が、現在は「尊厳性、永続性、固定性」から「個人化、無縁化、流動化」に変化していると指摘しています。また、先祖供養より自分の死後設計、過去から未来へと意識が変化し、未来志向と個人化だとも述べています。先祖には関心が薄く、死者供養よりも、自分の死後設計として墓を考える人が増えているのです。

榎村氏は墓のことを自分で選ぶ死後の住居と表現しています。そして、見たことのない先祖という過去の家族よりも、現在と未来の家族に対して意識は向いているのだといいます。ですから、生前に自己の墓を購入し、自分が「死後の住処」を確保することになります。自分の住処となると、希望する項目も増えます。墓地空間は明るい公園のような場所、厳かな場所、社会から隔離されていない所、などの条件が求められるようになります。

さらに、どこに入りたいかではなく、誰と入りたいかにこだわる人もいます。正確にいうと、誰と入りたくないかということです。笑いごとではなく、「死んだらあの人と一緒にやめてほしい」、特に妻のご意見が多いそうなのですが、とにかく妻は夫抜きで一人で墓に入りたい、あるいは子どもとは一緒に入りたいと言うのです。さらにペットと一緒に入れるような墓はないかという要望があったりしていて、そのような意味では、墓が本当に未来の住居みたいな意識を持つ人も少なくはないのです。ただし、いずれにしても葬送儀礼や墓についての担い手が、送られて葬られる当事者自身になってきたということが極めて大きな変化です。

日本の葬送秩序を支えてきたのは祖先祭祀であり、これは自己の死後を子孫に委ねるという思想によって保たれて今まで来ました。特に葬儀のやり方や墓を自分で選ぶという発想はなかったのです。ところが、今では自分たちが選ぶのです。そして、これは過去の人々とのつながりを切っていることになります。とても大きな変化が起こったといえます。

さて、④の疑問と課題についてです。aからいきます。自分の葬儀や墓について考えておくことは終活の一環となります。遺された者に迷惑や負担をかけないようにという気持ちは理解できないわけではありません。そしてご本人の意思が尊重されることも大切です。けれども、ご本人の考えのみで完結して良いのでしょうか。

私は、葬儀や墓にはさまざまな意義があると考えています。葬儀は故人の意思を尊重すべきものであるが、同時に遺された者が死者を送り、死という事実を受容するためにも必要なものなのです。亡くなった方の意思というのは尊重したいと思います。ご本人が葬儀は簡素にしてくれとおっしゃれば、それもわからないこともないし、あるいは、場合によって葬儀は不要だ、無用だという方もいて、なるべくその意に沿いたいという気持ちもありますけれども、でも、それは本当に亡くなった人の思いだけで、遺された人のことにはほとんど関心が注がれていないのです。遺された者は、やはり葬儀を行うことで初めて死を受け入れられるということがあるんですね。

葬儀をすることは、1つの大きな意義があります。別れをそこでしっかりしておくことです。葬儀には、その人が亡くなったのだということを受容させるという非常に重要な役割があります。東日本大震災では多くの方が行方不明になりました。現在も行方不明のままの方がたくさんおられますが、もちろんお亡くなりになっていると考えられます。けれどもまだ遺体が発見されないので葬儀ができないという方がおられます。それゆえに、いつまでたっても区切りがつかないと言われるのです。その話を知ったとき、私は、やはり葬儀は区切りであり、死を受容するための必要な機会であることを知りました。

bの墓の意義についても考えてみましょう。墓は遺体や遺骨を処理する場所であるのと同時に、「生者と死者の交流の場」という視点があります。人の絆を確認する場であるともいえます。墓の第一義的な目的は遺骨を納めることですが、ただ、それだけの場所だけではないですよ。墓に行って、亡くなった方と語らうことを行っています。このような場所がなくなって良いのでしょうか。亡くなった人と語らう場、少し言葉をかえると、死者の意思を確認する場所であり、死者の意思を受け継ぎ、自らの在り方を決意する場です。あるいは、人の絆を確認する場です。生者と死者が今なお切れてないことを確認することはとても大切であると思うのです。

私より少し年齢が上の知人の話をさせてください。その方のお父様が50代ぐらいの頃に、知人は「お父さんが死んだらお墓はどうしたらいいの？」と聞いたそうです。すると、そのお父様は、「墓なんてどうでもいい、その辺にまいたらいいだろう。好きにしたらいい」と答えられました。その後、年数が経って、お父様が高齢者になられた時、ご自分から「私が死んだら墓をどうするのか」と聞いてきたんです。私の知人が、「えっ、その辺にまいておくんだろ？ お父さん以前にそう言ったじゃないの、墓なんか適当にすればよって」と答えたら、お父様が、「いやいや、やっぱり墓を買おう」と言われたというのです。「家族のみんなと関係が切れてしまうような気がするから寂しい」と言われたそうです。

自分の死が近づいてきたリアリティーと、死への恐怖というものがお父様の考えを変えさせたのでしょうか。たとえ死そのものが恐怖ではなくても、死によって今生きている人たちの絆や関係性が切れてしまうことが怖い、と考える人は少なくありません。

少しお話がそれますが、仏教の法事はそういった怖れを払拭する行事でもあると思うのです。これを通じて、生者と死者とはずっとつながり続けることができる。日本にはそのような文化があると思うのです。いつまでたっても死者を忘れない。これは同時に自分のことも忘れてほしくないと思者が思っているからです。つまり、亡くなった人のことを覚えて、と言うけれども、同時に、法事を行う人たちが自分のときにも同じようにしてほしいという願望があって、それゆえに長期にわたる法事を保持してきたのだと思うのです。

墓は生者がそこに行って故人のことを偲び、故人に対してあなたを覚えているよと声をかける場所です。もしもそのようなものがなくなったら、どうになってしまうのでしょうか。

cにいきましょう。葬儀や墓は遺族や参列者が死について深く考える貴重な機会です。私たちが死について考えることは重要ですが、実際はなかなかできません。でも、墓や葬式に行くと、やはり自分の死について考えますよね。私はこれからどうなるのだろうかと考えたり、自分の生を見つめ直したりします。この貴重な機会がなくなると、私たちはどこで死や生について深く考える機会があるのでしょうか。

dでは、元来、葬儀や墓の手配は逝く者ではなく、送る者による行為ではないのか、と問いかけています。先にも触れましたが、自分の葬儀や墓は自分自身で決めておきたいという人が増えてきています。終活特集などでもそれが大きなテーマとなっているのですが、もともと、葬送という言葉があるように、送る側の行為です。死者をどうやってあの世へ送ればいいのかと考えてきました。原則的には送る人が死者をこうやって送ってあげたいという気持ちも大事だということは確認しておくべきでしょう。そのことを無視し

て、一方的に私はこうしたいと要望するのはいかなものでしょう。

そして、eにありますように、簡素化や簡略化によって失うものがある、ということです。終活によって葬式や墓について考えるとき、本当に墓は要らないのか、あるいは、葬式は本当に要らないのかと熟考することは必要です。『葬式は、要らない』という本まであります。「ゼロ葬」という言葉もあります。けれども、簡単に決めてしまっても良いのかと思います。葬儀を多面的に考察することで、意義を再確認できているわけですから。それゆえ、私は葬式や墓は必要だと思っていて、もう少し丁寧な議論が必要であると考えています。

最後に、そのようなことを踏まえた上で、まとめをさせていただきます。終活の評価については既に申しましたように、終活は悪いことではなく、良いことだと思っております。備えておくことは何事においても大事なことです。人は未来を予測できません。その意味においては、終活は高齢者だけではなく、すべての者がすべきことでしょう。ある程度年齢が高くなり、死が近づいたというリアリティーの中で開始するのが一般的ですが、あらゆる準備において早過ぎることがないと同様です。ただし反対に、ある程度が来たら終活しないといけなく、終活をすべきだと焦ることはないと思っています。拙速な行動が良い結果を生むとは限りません。

「ためらうこと」の大切さとレジュメにあります。これは児玉さんという方が指摘しておられます。日々、医療技術は進歩している。それも想定外のスピードである。対応に遅れがあるのも現実。つまり、どのように対応したら良いのかわからないということが医療現場にはたくさんある。そして、重要なのは「ためらうこと」であると言われてます。そして、それを語り合うこと。かけがえのないものとは、すっきり割り切ることのできないものであると最後に印象深く結んでおられます。

これは、いろいろなことに転用できる指摘だと思います。本当にこれで良いのだろうか、と思い巡らしてみる。そして、断定したり、結論を急いだりするのはなく、もう少し考えてみる。そのことを語り合うことが私も大切

だと思っています。終活に焦ったり、強迫されたりすることがないようにするためです。

終活に関する雑誌が多く出版されています。こんな雑誌をご存知ですか。2013年に出版された『終活読本ソナエ』です。年に4回、季刊で出ています。「ソナエ」ってすごいネーミングでしょ。たとえば、相続供養、遺言大研究、家族葬などのテーマが掲げられ、毎回有名な芸能人が登場しています。2013年からずっと続いていて、すぐになくなるかなと思ったのですが、よく売られているようで、私も一応研究上必要なので読んでいます。

でも大変だなと思います。終活についてのことが、たくさん書いてあるわけですよ。エンディングノートの書き方もあります。書くべきことや書いてはいけないこと、ポイントを決めるべきだとか、定期的に見直しましょうとか、方向性を大事に、などと書いてあると勉強している気分になってきます。飽きなくて良いのかもかもしれませんが、こんなに書かなくちゃいけないのか、とうんざりさせられるほどです。

そして、金銭的な情報が紹介されていますね。葬儀費用がいくらくらいかかるのかという情報を載せています。近年は、イオンという大きなスーパーが葬儀業界に参入しました。そして、不鮮明であると指摘されてきた葬儀料金の詳細を明示しました。注文通りの葬儀が手配できるというシステムになっています。

そのほか、墓の種類や流行などについての記事も満載ですが、私はこのようなものを読んでいると、終活に焦らされる気がするのです。準備は重要であると言いましたが、これによってストレスがたまりそうですし、さらに迷惑をかけたくない、面倒かけたくないという思いで日々を生きていくことが本当に望ましいのかなというか、それが私たちの人生の締めくくりとしてよろしいのかなと思うと、いろいろと考えさせられることがあります。

そして、終活はどうしても個人の作業になりがちです。これは気がめいてきますよね。特にお一人でエンディングノートを毎日書いて、これをどうするとか、あれをどうするかとやってやっている状態はいかなものでしょ

うか。もちろんそれが良いか、悪いかではなくて、やらなくてはいけないこと、と言われるとそうなのかもしれませんが、せめて他者と相談するようなことが重要ではないかと思うのです。

さらに終活を行う際には、他者のさまざまな考え方を尊重し、自分自身の考え方も尊重されなければならないことが多々あります。たとえば、延命治療についての考え方です。

最近こういった話をさせていただく機会が増えてきています。当然のことながら、いろいろな方がいて、不満口調の方もおられます。私が終活をそんなに焦る必要はないと言い、延命治療についても、それが不要であるという結論を急ぐのではなく、もう少しいろいろと考えておく方が良いと言うと、「いや、私はあんなふうになってまで生きたいとは思いません」と返す人もおられるのです。実際、チューブやセンサーが体に取り付けられている状態で、生きている方がたくさんおられます。このような様子を例えて「スパゲティー症候群」などという酷い表現があるようです。多数のチューブが体につながっていて、自力では動くことができないような場合、先に述べたQOLの問題が生じます。このようになってまで生きたくはない、と言われるのです。

これは学生に質問をしても同様の答えが返ってきます。学生の多くが、私はそんなにしてまで生きたくないと言います。比較的あっさりと答えるんですよね。でもそれはリアリティーがないからだと思います。自分自身はもちろん、身内や近親者にもそのような状態の方がおられないのでしょうか。そうまでして生きたくないというのは1つの考え方として尊重されなければなりません。しかし、反対にどのような状態であっても生き続けたいという人もいらっしゃるかもしれないわけです。その意見も当然のことながら尊重しないといけなと思うのです。自分の考えを尊重してくださいというのであれば、同様に他者の考えもやはり尊重しないといけません。

なぜ、このような発言をするかという、現在の日本の風潮が、たとえば尊厳死などを推奨する方向へと動いているからです。何か大きな力が働いて

いると思います。テレビや新聞の記事がさりげなく世論を誘導しつつあります。これは推測であります。高額となっている保険料を減らすのが目的でしょう。

延命治療は大きなお金がかかってきます。ですから治療されている患者さんに、早く亡くなってほしいと考える人がいるのです。そのようなところにお金を余り使わずに別のことに使いたい。でも、そんなことは言えませんよね。そこで、そこまでして生きていたいのかという風潮をつくり上げていきます。今は、そのような方向に向いています。

現在の日本は、確かに少子化であって将来的には不安要素が多く、特に年金を含めた財政面の危機は大変な状況も予測されていますから、少しでもお金を確保しておきたいのは事実です。しかし、その実現のために意図的に一方向に世論が流されていくのは少し不安だと思っています。さらに別の考え方をもつ人を非難するような風潮が発生することを危惧しています。

たとえば、先に述べたように、どのような形であっても生きていたいという望みも保障されなければならない。あるいは、どのような形であっても生きていてほしいと思う家族の意思もあるのです。しかし、そのような人に対して周りがプレッシャーをかけることが予想されます。「そんなにしてまで生きたいのか」「そんなにしてまで生かしたいのか」という意見は現実にあります。延命治療によって長年生きている人に対する批判めいた言葉が、医療の現場では結構言われていると聞いたことがあります。今後はこの傾向がさらに強くなるに違いないと思ひ危惧を覚えているのです。

そして、最後です。繰り返しますが、迷惑や面倒をかけないことは確かに良いことです。しかし、それが強調され過ぎる人間関係や今日の社会のあり方には問題があると私は思っております。何度も申したように、迷惑をかけないと面倒をかけないとか、相手に負担をかけないということは、それはすばらしい考え方です。でも、迷惑や面倒という言葉がひとり歩きすることによって、人間関係や社会が変わってしまうのではないかなと思いますよね。つまり、面倒をかける人間が許せなくなる。迷惑をかける人に対して厳

しい態度で接するようになる。あの人は非常に負担をかける人間だ、面倒かける人間だ、とレッテルを貼るのです。

けれども、私たちは、持ちつ持たれつという精神、そういうものを教えられてきた、学んできたと思うのです。迷惑や負担はかけない方が良く、かけられない方がありがたいです。それでも人間は、生きていることで負担をかけてしまったり、誰かに迷惑をかけてしまったりすることがあるのです。それを認め合った上で、お互いさまですよ、と声を交わしてきたのではないのでしょうか。今度は私だって同じように迷惑かけることがあるからねと、私だって負担をかけているから、というところでお互いに許しあい、支え合ったり補い合ったりしてきたことが減ってくるのではないかと、怖れているのです。迷惑をかけないために、負担にならないために、という言葉が終活関連の本や雑誌の中でもたくさん出てきます。

そして重要な視点をあげておきます。自己決定をしても、時や環境に応じて、考え方も変わる可能性が大いにあるのです。人は謙虚さを忘れないことが大事です。先の墓の話のように、人はいろいろと考え方が変わることがあります。若い時にはそんなふうに思わなかったけれども、年齢が上がると、以前とは異なることを考えるようになります。今までは死のリアリティーがなかったけど、より死に近づくことによって、今までと考え方が変わったと。それは変えてもいいんですよ。ただし、それならば謙虚であるべきだと思います。ある事柄に対して、こうなのだとか、こうあるべきだと言い切ってしまうのは謙虚であるとは言えません。

そして謙虚といえ、いくら自己決定をしたといっても実際に実行できるのは自分であるとは限らないということですよ。必ず誰かの手を煩わせるのです。どんなに自分で全部決めていたとしても、迷惑をかけないとか、負担にならないなんて無理です。自分で自分の葬式はできません。自分で墓に入ることは不可能です。自分で散骨もできません。必ず誰かの手を借りるということ、それゆえの謙虚さは覚えておかななくてはいけないですよ。これだけやったのでは十分ではなくて、それでも誰かのお世話になるのだという

認識を持っておくことは重要です。

一つ付け加えておきたいのは、私は「終活」という言葉自体には疑問をもっています。就職活動という言葉は短くしたものが、「就活」です。就職活動というのはゴールがはっきりしています。就職することを目指して活動するから就職活動です。結婚するための「婚活」というものもあります。あれは結婚をするのが目的で、結婚がゴールです。最近「妊活」という言葉もあるらしいです。妊娠が目的です。どんな場合でも、就職であったり結婚であったり妊娠であったり、ゴールが明確です。では、「終活」のゴールとは何でしょうか。終わりに向けての活動とは違いますね。活動しなくても必ず終わりは来ます。ですから、終活の目的は、単に終わるのではなく、良い終わり方をする、そういうことを考える活動だろうと私は理解するわけです。では、今度は良い終わり方とは何かという話になってきます。

再三触れてきましたが、おそらく、良い終わりとは迷惑、面倒、負担を人につけない終わり方を指すのでしょうか。でもそれは違うのではないのでしょうか。

私がおのように考える理由を述べます。ある知人が亡くなりまして、私はその人が残されたものの整理を手伝うことになりました。確かに時間がかかり、かなりの手間がかかる作業でしたが、それを迷惑だとは一瞬たりとも思いませんでした。もちろん負担にも感じなかった。なぜかという、やらされているのではなく、逆にそれをさせていたが良かったからです。もし迷惑だとか面倒だということのだったら、むしろ迷惑をかけてくださっても結構ですと思いました。そして、そういう人間関係を築くことができたことに感謝をしました。ですから、私たちは、あなたになら迷惑をかけられても良いとか、逆にあなたにだったら面倒をかけられても良いと言ってもらえるような生き方を指すということ、このことも大事ではないかなと思うのです。

たとえば、私がバタンと逝った時に、おまえのためだったら、あなたのためならば、迷惑とは思わないよと思われる、そのような生き方をしたいなど

私は思うわけです。それが自分の中の目標であったりするわけですよね。なるべく迷惑はかけたくないのですけども、しかし、単純に迷惑をかけられたというのではなくて、そのような言葉で済まないような人間関係を築いていくことだとするならば、「終活」にも意味があるのではないかなと思いますし、これからの生き方の大きなヒントになればと思っております。

長々と話をさせていただきましたけれども、一度ここで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

○司会 中野先生、ありがとうございます。

初回の時にもお話ししましたが、私は84歳になる母がおりまして、最近自分で歩くことも、それからだんだんひどくなって、寝返りを打つことも、手を上げて食事を口に運ぶことも不自由になってまいりまして、実は4日ほど前にアメリカから帰ってきて翌日母のところへ行きましたら、いろいろと準備をしているのを見せられまして、^{きょうかたびら}経帷子一式とか、葬式代はこれぐらいだから死ぬとおろせなくなるから引き出しておきなさいとか言われて、結構ガンときたのですが、今考えたら、あれは母なりの終活だったのですね。ですから、本当に身につまされて、きょうのお話を伺いました。

皆様もいろいろ今日のお話を伺われて深く思われることがあったと思いますが、もしよろしければ少し時間がございますので、質問とかいかがでしょうか。

○参加者 私は、今90歳の父親と86歳の母親の介護をやっているんですけども、思いますのは、自分が小さいころはものすごく親に迷惑かけたわけですよ。そうすると、逆に今度は親が90歳とかになると、非常に認知症とかも進んで子供みたいな感じになって、子供返りというか。そうすると、何か思うのは、迷惑かけられて当然だなと自分で思うんですよ。

というのは、自分も小さいころにものすごく親に迷惑かけたんだし、今度は子供みたいになった自分の親を、自分が今度は逆に親みたいになって迷惑を受け入れるというか、何かそういうのがちょっとあります。決して苦労とは思わないんですよ。むしろ育ててくれた親に対して…。

効率化とか、大切なものは目に見えないとかいうようなありましたけど、お金とかにかえられないものですよ。人間の情の世界とか、何かそういうものを何でもかんでもお金で換算したり、あるいは自己責任論とかありましたけど、あれは経済界の風潮みたいなものが本当に恐ろしいという、人生の別れの場面で金に換算すると非常にいやらしいものが入ってきて、何かみみっちい日本人になったのかなとか、そんな感じがして、僕も本当に終活というのがどうも腑に落ちないところがあったんですけど、どうも嫌な言葉だなというのをきょう改めて感じましたね。

何か経済界が言ってくるようなことを平気で人と人の別れの世界に持ってきて、そこで金もうけなどを考えているのかもしれないのですが、そんなのは嫌だと、僕はそんな感じがしましたね。

- 中野 ありがとうございます。私をも励ましてくださるお言葉を頂きました。結局、そのような生き方をお父様やお母様がなさってらっしゃったということであり、それがやはり最後にあらわれてくるものになりますね。私たちがどう生きていけば良いのかとか、最後の最後までどうありたいのかと考えさせられます。

これはご家族がいらっしゃらない方でも同じことだと思います。おひとり暮らしの方でも、たとえば、いつも積極的に近所の方にも声をかける人、実際に私の近くにそういう方がいらっしゃいました。いつも元気よく御挨拶してくださり、その方が声をかけてくださることを嬉しいなと思っていました。ところが、その方が亡くなりました。私はその方のお葬式には行きたいと、いや、行かなくてはいけないと思いました。そういうことはやはりあるんですよ。家族や近親者という関係性ではなくても、この人のためになら時間を割いてでも駆けつけたいという関係、そういう生き方を、私たちは目指すべきではないかなと思ったりもします。ありがとうございました。

- 司会 いかがでしょう。もう1人ぐらいよろしいでしょうか。いかがですか。

30年ぐらい前ですけど、私の恩師のお母様が亡くなったときに、研究室総

出で丸一日、結構遠方だったんですけど、御葬儀のお手伝いに参りました。でも、先生のお母様にお目にかかったことはなかったんですよ。でも、昔はそれが当たり前で、さっきお話のあった一般葬ですね、それが私たちも当たり前だと思っておりました。

ところが、2年ほど前に研究仲間の現役の大学の教授だった人ですけども、世界的にも有名な研究者だった人が、がんのためにとうとうお倒れになったんです。御本人の意思もございまして、本当に少人数で家族葬という形でなさいまして、ですから大学関係者の出席人数も制限され、院生、学部生がほとんど参加できませんでした。

その後、学生たちが受け入れられてないということがだんだんわかってまいりまして、やはり遺された人たちのお気持ちをどのように受け入れていくか、その人たちの気持ちの行き先まで考えなきゃいけないというのは身にしみて思ったことでして、本当にきょうの先生のお話をしみじみと聞かせていただきました。

○司会 いかがですか。ほかにもし御質問がなければそろそろお開きとしたいと思えますけれども、よろしゅうございますか。じゃあ、中野先生、きょうは本当にありがとうございました。

○中野 どうもありがとうございました。

「みんなで考えよう、女性学の未来」プロジェクト

Future of Women's Studies Project

神戸女学院大学 女性学インスティテュート
Women's Studies Institute of Kobe College

2016年度

「みんなで考えよう、女性学の未来」プロジェクト実施報告

昨春、前任者から「学内に専門の先生もいないし、『女性学評論』の投稿も少なくて原稿集めが大変なだけだから隔年発行を考えた方がいい」と聞いて、本学における女性学研究のあるべき姿は何かと思案するところからスタートした。4月の第1回委員会で本プロジェクトの構想を話し合い（ネーミングは奥野佐子先生）、7月に客員専任講師のモニカ・チニウィックス先生の講演会、9月に元本学教員の森永康子先生と飯田祐子先生を招聘して講演会とディスカッションを行うこととした。以下はその記録である。（文責：津上智実）

講演会

2016年7月7日(木) 18:20~19:20 Monika KSIENIEWICZ

Impact of the Recommendations of the United Nations Convention on the Elimination of all Forms of Discrimination against Women (CEDAW) on Gender Equality in Japan and Poland: Article 7 on Political Representation

講演会&ディスカッション

2016年9月30日(金)

14:00~15:30 森永 康子 「人々はなぜジェンダー格差を受け入れているのか」

15:40~17:10 飯田 祐子 「文学とジェンダー 知ることと感じること」

17:20~18:30 ディスカッション 「女性学の使命と展望」

司会 : 津上 智実 (女性学インスティテュートディレクター)

出席者: 飯田 祐子 井上 紀子 松並 知子

三杉 圭子 森永 康子 孟 真理

南條 理恵子 笹尾 佳代 (アルファベット順)